

民族浄化・人道的介入・新しい冷戦——冷戦後の国際政治

〈目次〉

序章

第Ⅰ部 「民族浄化」と「人道的介入」

第一章 「民族浄化」とは何か

第二章 「人道的介入」をめぐる言説状況

第三章 「リベラルなタカ派」の軍事介入論

——マイケル・イグナティエフの場合

補論

イグナティエフの家系および彼のアイデンティティについて

107

第Ⅱ部 冷戦終焉後のユーラシア空間における地政学

第四章 二一世紀初頭のユーラシア空間

——「新しい冷戦の兆し」論と「カラー革命」論を中心に

第五章 ヨーロッパとロシアの間のウクライナ

——「オレンジ革命」再考

第六章 ロシア・グルジア・南オセチア戦争、二〇〇八年八月

1

17

70

121

158

188

第Ⅲ部 国際政治と政治思想

第七章 リベラリズムと他国への介入 231

——ジョン・ロールズの場合

補論 マイケル・ウォルツァーの正戦論および介入論 245

第八章 ジェノサイドとハンナ・アーレント 258

——『イエルサレムのアイヒマン』をめぐる

第九章 E・H・カーの国際政治思想 294

——ハスラムによる伝記を手がかりに

あとがき 321

索引

あとがき

本書は冷戦終焉後の国際政治に関わるいくつかの重要トピックを、政治思想との関わりをも意識しつつ論じた文章を集めたものである（直接にはそれから外れたように見える文章も、背後の問題意識としては共通するものをもっている）。考察の主要な素材としては、旧ソ連諸国および旧ユーゴスラヴィア諸国に関わるものが多いが、それらは純然たる地域研究の観点から取り上げられているのではなく、むしろ国際政治全体に関わる重要な事例という観点からの考察が試みられている。その背後にある問題意識は、これらのテーマは多くの国際政治学者によって見落とされがちな一種の「死角」に入っているのではないか、だとしたら、その点を補うことは全体像再構築にとってもなにかの貢献をなすのではないか、という期待である。いうならば——その成否はともかく、著者自身の狙いとしては——本書は国際政治学に対する「異端の問題提起」ともいうべき性格を持っている。

実を言えば、私は元来、国際政治学という研究分野に積極的関心を持つことがなかなかできなかった。もともと、国境を越えた人や文物の交流・摩擦・変容といった主題には若い頃から関心をいだいていたが、それはいわゆる「国際政治（学）」とはうまく交わらないように思えた。何といっても国際政治の最も主要な登場人物は高い地位についている政治家・外交官・軍人たちであり、そうした人たちの行動や思考というものは、私にとっては縁遠いものかと思えなかつた。そういつた主題もそれなりに重要なものだろうとは思ひ、大学での講義の必要もあって、関連する知識を少しずつ蓄える作業も長年にわたって続けてはきたが、それが自分自身の主要な縄張りという風にはなかなか

思えなかった。そのような私が、ここ十数年の間に、いつのまにか国際政治に関わるいくつかの問題に次第に引きつけられるようになってきた。それは、以下に述べるようないくつかの契機によっている。

先ず第一に、ソ連解体に伴って、それまでソ連内部の地域・民族問題だったものが、独立国家同士の国際関係に転化するという特異な事態が生じた。前者はもともと私の主要研究課題だったが、それが「内政」上のテーマから「国際政治」上のテーマへと変容したのである。

第二に、国家の解体（ソ連・ユーゴスラヴィア・チェコスロヴァキア）あるいは統合（東西ドイツ、また現実のものとはなっていないが潜在的可能性が話題となるルーマニア・モルドヴァ関係など）という特異な事態が、否応なしに私の関心を引きつけた。通常の国際政治ないし国際関係論では、「国際社会」の基本単位として、主権をもった国民国家というものが想定され、その単位は固定的な存在と見なされることが多い。「主権国家」の内部の事情は一種のブラックボックスとして不問に付し、それらの「外」での相互関係を議論の中心におくというのが、通常の国際政治学の作法のようである。ところが、国家の解体あるいは統合とは、その基本単位のドラマティックな変容を意味する。これは国際政治ないし国際関係論の基本前提に関わる深刻な変動である。そうした事態が、私の専攻する地域およびその隣接諸国で生じた——現実には限られた事例だが、そうなるかもしれないという予想の広まった例は、もつと多数にのぼる——ことは、私の注目を引きつけずにはおかなかった。

三番目の要因として、世界各地の地域紛争・民族紛争の中でも特に顕著な例として、旧ソ連・旧ユーゴスラヴィア各地の事例が広く注目を集めたということがある。そこにおいては、「民族浄化」というセンセーショナルな言葉が使われたり、そうした事態に対しては「人道的介入」が正当化されるといった言説が、かなり広い範囲で流通したりした。ところが、そうした言葉を使っている人たちの大半は、旧ソ連・旧ユーゴスラヴィア各地の具体的な実情に通じているわけではなく、むしろかなりあやふやな先入見を前提に議論を組み立てている場合が少なくない。このよう

な状況を目の当たりにして、この地域の研究に携わっている人間は、たとえそれらの紛争それ自体についての専門家ではないにしても、とにかくいくつかの基本的な事実に関して、一石を投じる義務があるのではないかと感じるようになった。

そして最後に、二一世紀初頭には、「新しい冷戦」の兆しが一部でささやかれ、人々の不安をかきたてるという状況が生じた。しかも、そこである「新しい冷戦」とは一体どういう性格のものかについての本格的な検討が日本ではほとんどなされなかったことが、私の懸念を倍加させた。「新しい冷戦」にせよ、かつての古典的冷戦にせよ、私自身の中心的な研究テーマではないが、にもかかわらず、この事態を前にして全く無関心でいることは許されないように思われた。もっとも、現実の国際政治の動向としては、米政権のブッシュからオバマへの交代に伴い、「新しい冷戦」論はやや後景に退き、一時期の緊迫感は薄れた。それでも、当時の懸念が完全に過去のものとなったわけではないし、その当時の言論が再考されないままに放置されているのはやはり問題ではないかと思われる。

本書で取り上げているのは、これらのうち、主として第三および第四の問題に関わるものである（第一、第二の問題については、ソ連解体過程の歴史研究として、この間のいくつかの著作で論じてきたし、その作業は今後も継続予定である）。

いま挙げた一連の主題は、日本の状況と直接関わるところがそれほど大きいわけではない。しかし、日本のジャーナリズム・評論などにおける世界認識という観点からいうなら、これは大きな認識の欠落ないし歪みと関わっているのではないかと思われる。二〇〇三—〇八年頃の日本のマスコミ・言論界では、イラク政策をはじめとする「テロとの戦争」に関してはブッシュ米政権に批判的な論調が多かったが、にもかかわらず、ロシアと旧ソ連諸国（ウクライナ、グルジアなど）の動向に関する限り、ブッシュ政権に近い立場からの宣伝的な情報を鵜呑みにする傾向が圧倒的に強かった。また、イラク戦争について考える場合、一九九九年の「人道的介入」（NATOによるセルビア

空爆)にさかのぼって考える必要があるはずだが、そのような問題意識に立って書かれた文章も極度に少ない。私が不十分な試論としてであれ、これらについて何かを言わねばならないと感じるようになったのは、そうした事情による。

以上、元来国際政治学と縁遠かった私が、ここ十数年の間に少しずつこれらの主題に引きつけられるようになってきた経緯について述べたが、いまでもまだ、国際政治の本格的専門家になったとは言えず、本書は専門研究とエッセイ的な評論の中間的な性格を帯びている(注の付け方も、本格的な学術論文に比べればかなり粗い)。いくつかの章で、旧ユーゴスラヴィア、ウクライナ、グルジアなどの情勢に各論的に触れたが、これらの地域について、私は長らく関心を持ち続けてきたとはいえず、本格的な専門研究に携わっているわけではない。また、それらの問題の考察に関連して政治思想の問題にも多少踏み込んだが、これも本来的な専門というよりは、むしろ「余技」に近い。そういう意味で、本書がやや中途半端な性格をもっていることは否めない。とはいえ、現代日本の言論状況の問題点として、高度に専門細分化された学術論文と拙速かつ皮相な時事評論のあいだの乖離があまりにも甚だしく、両者をつなぐものが極度に乏しいという事実があることを考えるなら、このように中間的なジャンルのものも、ある種の存在意義を主張できるのではないかというのが、本書を世に送るに当たったの秘かな期待である。

内容とは別に、本書には、論じ方におけるある種の特徴があるということに、全体をほぼ書きあげた後に気づいた。

通常のアカデミズムの作法の一つに、大量の関連文献を注記するという慣わしがある。それにはもちろん重要な意義があり、私自身も通常の研究論文を書くときにはそれに倣っている。しかし、往々にして、あまりにも大量の文献を列挙することばかりにかまけて、個々の文献のじっくりとした検討や咀嚼がなおざりにされてしまうきらいがある

のではないかという危惧をいだかされることもしばしばである。これに対し、本書では、比較的少数の文献を丁寧に読みながら論を進めるということを重視した。もちろん、現に大量の文献がある以上、それらをできるだけ幅広く読むべきであることはいうまでもない。理想論を言えば、大量の文献をこなしながら、なおかつそれらを丁寧に咀嚼すること——いわゆる「多読」と「精読／熟読」の併用——が望ましいが、実際問題として、それは「言うは易く行なうは難し」の典型である。そして、ややもすれば「読み飛ばし」に流れる風潮が広まっているというのが、現代日本の実情である。とすれば、中には、少数の文献の丁寧な咀嚼に力点をおいた作品もあってよいのではないか——このような意識が本書執筆の背後にはあった。

第二に——これは第一点とも関係するが——言葉の意味へのこだわりが、本書の一つの特徴となっている。科学的認識にとつて、各種の用語およびそれによつて表現される概念というものは必須のツールだが、それらがややもすれば意味内容をきちんと確認されないままに乱用されるという風潮が広まっている。本来、概念の精密な確定を職業的義務の一つとするはずの研究者たちの世界も、そうした風潮と無縁ではない。学術用語が一種の「業界用語」「ジャーゴン」と化して、意味内容の不確定なまま流通しているという状況は、決して珍しくない。これに対し、本書では、「この言葉は一体どういう意味をもっているのか」「これらの論者はこの言葉をどういう意味で使っているのか」といった問題の吟味を重視した。その意味で、本書は語義論（セマンティクス）の本ともいべき性格をもっている。

本書のうち、序章、第三章補論、第四章、第七章補論は純然たる書き下ろしであり、それ以外の各章は、かつて「電子版ディスカッション・ペーパー」として執筆し、私のホームページ上で公開した原稿に由来する。もともと、それらの文章はもともと討論用の未定稿という位置づけだったことから、今回の収録に際してかなりの補訂を施し

た。特に第五章と第六章は全面的に改稿した結果、ほぼ原形をとどめないものになっており、事実上の新稿である。他の章も大なり小なり補訂をしてあるが、一応原形をとどめているので、それらの章については末尾に初稿の執筆時点を付記した。

公刊のあてのないまま書きたててきた「電子版ディスカッション・ペーパー」の中から国際政治関係のものをまとめて一書に編むことを勧めて下さったのは、有志舎の永滝稔氏である。学術出版をめぐる情勢がますます厳しさを加える中で、社名どおり「志」を高く掲げて出版事業を続けている同氏に深い敬意と謝意を表したい。

二〇一〇年一月

著者

*本書の準備に際して、独立行政法人日本学術振興会から二〇〇七—〇九年度に科学研究費基盤研究A「非欧米世界からの比較政治学」（課題番号一九二〇三〇〇七、研究代表者塩川伸明）の交付を受けた。